■著者紹介

昭和四年大分県別府市生まれ。大分経済専門学校卒。経済誌出版、不動産売買、飲食店経営等に携わる傍ら、推理小説を執筆。昭和四十九年オール讀物推理小説新人賞を受賞。以後、桜田忍のペンネームで本格推理を数多く書いている。五十三年度江戸川乱歩賞候補となった「凶弾」で、ドキュメンタリーノベルに新生面を拓いた。この「極刑」は「凶弾」「強殺」に続く書下ろし長編ドキュメンタリーノベル第三作である。

極刑（きょっけい）　定価　九八〇円

第1刷発行　昭和56年4月30日

著　者　福田　洋

発行者　野間惟道

発行所　株式会社　講談社

〒112　東京都文京区音羽2—12—21

電話　東京(03)945—1111(大代表)

振替　東京8—3930

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　株式会社黒岩大光堂

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

© 1981 HIROSHI FUKUDA　Printed in Japan

0093-307493-2253（0）　（文2）

極刑

――女流デザイナー誘拐殺人事件

目次

一章　誘拐　5
二章　疑惑　22
三章　死体　39
四章　捜査　48
五章　逮捕　65
六章　起訴　84
七章　複数　96
八章　一審　115
九章　控訴　141
十章　視点　165
十一章　手記　181
十二章　虚実　200
あとがき　226

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

装丁——辰巳四郎

一章　誘　拐

1

一月十三日は、高森由利子の二十四回目の誕生日に当っていた。新年が明けて二週間もたたない日に生まれたせいで、由利子は殆ど誕生日を祝って貰ったことがない。正月のお祝と一緒にされてしまうのだ。

だが、今年だけは、母の信子がさきに言いだした。娘ももう結婚適齢期のまん中にいる。今年辺りいい縁談があれば決めてしまいたい。そうなると、ゆっくり誕生日を祝うこともできなくなる。

そんな思いが、母の胸にはあった。それで、十三日の夜にささやかなパーティを催すことにしたのであった。

高森家は、新潟市西大畑町の住宅街の一角にある。数日降り続いた雪はやんでいたが、辺り一面は銀世界であった。

石油ストーブで暖まった食堂のテーブルを囲んだのは四人である。由利子、母の信子、甥で小学生の芳樹、それに桜井という三十四歳のお手伝いさん。

芳樹は、由利子の兄、正裕の長男で八歳になる。本家から小学校に通っていたのである。四人がテーブルにつくと、まず芳樹がお盆をつきだした。

「お姉ちゃん。誕生日、おめでとう」

盆の上には、小遣いを溜めてデパートで買ってきた五十円のハンカチ二枚と、兄夫婦からの贈物、それに紙片が一枚のっていた。

紙面には「スキーにいく時の引換券」と書かれていた。由利子は雪国育ちだから、スキーが大好きだった。つい数日前も、裏磐梯にいってきたばかりだ。

次は、月末にどこかへいく予定を立てていた。その時の費用を母にせがんでいた。だが、現金で渡すと、すぐ費ってしまう虞れがある。末ッ子だし、遊び好きでわがままな娘なのだ。それで、母は引換券にしたのだった。

紙片をつまみあげた由利子は、まあ子供扱いね、と唇を尖らせてみせたが、すぐに、しみじみとした声で、最近こんなお祝して貰ったこと、なかったわね、と呟いた。

卓上には、エビフライ、ハム、モヤシのバターイタメ、タラコ、いなり鮨などを盛った皿が並んでいた。湯気をたてているフロフキ大根やコンニャクは、ユズ味噌

をつけて食べる。これらは、由利子の大好物だった。
家族は、とりとめもない会話のピンポンゲームを楽しみながら、大いに健啖ぶりを発揮しはじめた。
食事が終ると、部屋をかえ、茶の間の暖いコタツに入った。
バースデーケーキを、お手伝いさんが運んできた。
信子が訊いた。
「ローソク、つけるかえ?」
由利子はニヤニヤして答えた。
「いいわよ。年齢のことなんて、考えたくないもん。昨日も、誰かが、誕生日、お悔み申しあげますなんて、ハガキをよこすんだもん。相手の見当はついてるけど」
信子はケーキにナイフを入れながら言った。
「お友達から皮肉られても仕方がないよ。今年くらい、なんとか、いい相手を見つけんばね。お前みたいに、東京へお嫁へいきたいなんていうとったら、なかなかむずかしいよ」
由利子は、ケーキののった皿をうけとりながら、ことものなげに言った。
「東京から帰ってきた頃は、大都会で暮せたらいいな、なんて考えたけど、いまは、もうそうでもない。いい人がいたら、こちらで結婚するわ」
信子は頷いた。ケーキを食べながら、話題は暫く結婚問題の周辺を流れていった。

高森信子は、今年六十六歳になる。その半生は決して平坦ではなかったが、いまは、すべてが順調で、由利子の結婚を見届けさえすれば、思い残すことはないという心境であった。
高森家は、地元では名の通った旧家で、代々綿布問屋を営んできた。信子の夫、徳次は、昭和二十四年六月に病没した。
まだ戦後の混乱期であり、財産税滞納で家じゅうに、赤札を貼られたりして、信子にとっては苦難の時期であった。
三十年の新潟大火のあと、以前の邸跡をガソリンスタンドに改造し、その経営にのりだした頃から、経済的にはたちなおってきた。
だが、その間も、不幸は重なった。母、次男、長女、次女と次々に肉親が病死した。信子は、六人の子供を生みながら、その半数を夭折させていた。
しかし、残った子供たちは立派に成長し、社会人となった。長男の茂男は、現在三十七歳で、大阪でPL教団の教師をしていた。信子がPLの新潟支部員として信仰の道に入ったのは、長男の奨めによったからであった。
三十四歳になる三男の正裕は、新潟市から二十五キロの五泉市に住み、メリヤス問屋、高森商店を自営している。業績はきわめて好調であった。
由利子は末ッ子である。新潟小、寄居中学から、新潟

中央高校へ進み、さらに、三十四年四月、東京杉並区の女子美術短期大学生活美術科に入学、卒業後も東京でデザイナーの勉強を続けたが、三十八年三月、故郷へ戻り、高森商店に勤めはじめた。

由利子が自動車運転免許をとったのは、一昨年の九月であった。その前、八月中旬にブルーバードの中古車を買っていた。その車で毎日、五泉市まで通勤していたのである。

ところが、ここ数日来の雪で道路状況が悪くなった。由利子は仕方なく、愛車を家において汽車にきりかえていた。

その日の午後五時ごろだった。

五泉市の店から、自宅の母親に電話がかかってきた。電話口で由利子は、五泉発午後五時四十六分の磐越西線の列車が、降雪で運休になったと告げたあと、訊いた。

『誕生日だし、早く帰りたいのよ。ハイヤー使っていい？　千七百円くらいかかるけど、お母さん、払ってくれる？』

信子は、お店の車で送って貰いなさい、と答えた。その時は、車は新潟にいっているということだったが、間もなく連絡が入った。

『いま、クラウンが戻ってきたのよ。これから、運転手の中岡さんに送って貰うわ。けど、中岡さんもひどく疲れてるらしいから、新津まで送って貰って、あとは汽車にする』

由利子は無事に、七時半にはパーティの席に連なったのだが、信子は店のクラウンが、家の近くまで送ってきたことは、ついに聞き洩らしてしまった。

2

由利子は、目鼻だちのはっきりした美人で、なに不自由なく育った娘らしく、人見知りしない開放的な性格であった。社交家で話上手で、パーティにも出入りし、男友達も少くなかった。友人たちが奉[illegible]たニッ[illegible]ムはジャジャ馬からとった「ジャジャ」である。デ[illegible]ナーという職業がら、服装もつねに流行を先取りしていて、地方都市では周囲の注目を集めるだけの派手な娘であった。

その夜もケーキを食べながら、しきりに冗談をとばし、一座を湧きたたせていた。

芳樹が、ケーキのお代りをねだった。

信子はもう一人の同居人で、ガソリンスタンドの店員である、十七歳の少年の分を、忘れずに小皿にとった。少年は定時制高校に通っているので、間もなく帰宅するはずだった。

「はい。残りは、全部、芳ちゃんにあげようね」

信子が、芳樹の皿に、ケーキをのせてやった時だった。電話のベルが聞こえた。電話機は玄関の近くの廊下

においてあった。
信子はたちあがると廊下に出て電話をとった。耳にあてた送受器が冷たかった。男の声だった。
「高森さんですね？」
そうですと答えると、声は続いた。
「警察の交通課のマツダですがね、おたくのクラウンが……」
信子の耳には、警察の交通課という言葉ははっきり聞こえたが、姓の方はマツダかマチダか曖昧だった。ただおたくのクラウンが、仲通りのなんとかさんのお宅の邪魔をしているから、という意味は判った。――後刻信子が通報した警察の記録には、八時十分と八時三十分の二回、呼出しがあった旨、信子の言葉として、記されているが、呼出しは一回だったと信子はのちに訂正する。――
信子は、電話の内容に首をかしげた。五泉市の店には、四台の車がある。だが、クラウンは一台だ。由利子はクラウンで新津まで送って貰うといっていた。その車がいま時分、新潟にいるはずはない。
信子は由利子を呼び、電話を替って貰った。由利子は、その車のナンバーは、と訊き、うちの車じゃないわ、などとやりとりしたあと、言った。
「よろしゅうございます。これからすぐ参ります」
送受器をおくと、由利子は外出の準備にかかりながら喋った。
「警察って、いやねえ。うちの車じゃないっていうのに、それを確認してくれというのよ。すぐそこだからいってくるわ」
ベージュ色の半コートをはおった由利子は、玄関に出ると、半長ブーツをはいた。コタツに戻っていた信子は、そこから声をかけた。
「ご苦労さん。でも、クラウンがこちらにきとるはずはないと思うんだけどね」
由利子は、黒皮の手袋をはめ、柄の長い洋傘をもって、玄関の戸を引きながら、なにか答えた。だが、その声は信子の耳には届かなかった。戸のしまる音がきこえた。

3

由利子が出ていったあと、信子は芳樹を風呂に入れた。お手伝いさんは後片づけにかかった。浴室から出た芳樹の体をバスタオルで拭いてやり、歯を磨かせ、寝室に連れていった。茶の間に戻ってくると、同居の少年が高校から帰ってきていた。信子は、とっておいたケーキを食べるようにいい、コタツに足を入れながら、お手伝いさんの方へ声をかけた。
「由利ちゃん、遅いね？」
お手伝いさんは、流し台で食器をガチャガチャいわせながら訊いた。

「どこまでいかれたんですか？」
「それがはっきりせんのだけど、近くなのは確かだよ。もうだいぶ経つのに、おかしいね……」
信子は、交通係の言った家の名前を思い出そうとしたが、はっきりしない。
せめて、名前でも判れば、迎えにいってみることもできるが、名前が判らない以上、どうしようもない。
胸の中に、微かな不安が拡がってきた。だが、娘はもう二十四歳なのだ。それに、男まさりなほどハキハキしている。まさか、誘拐などされる訳はない。もしかして交通事故に遭ったのでは……？　信子はそう思いつくといてもたってもいられなくなった。
「なにかあったのかもしれんから、警察へ電話してみようかねえ」
手を拭きながら茶の間に入ってきたお手伝いさんに信子は呟くように言ってから、ケーキを食べ終った少年に、電話帳で中央警察署の番号を調べるよう、頼んだ。少年は電話帳をコタツの上にもってきてページをめくりはじめた。だが、番号が各担当課別になっているのでどこにかけたらいいのか判らない、と首をひねっている。
その時、電話のベルが鳴りだした。お手伝いさんは、玄関の方へ急ぎながら言った。
「由利子さんですよ、きっと」
二言三言応答の声がしたが、お手伝いさんは、すぐに茶の間へ戻ってきた。
「男の人です。奥さんに代れ、っていきなり言うんですよ。こわい声を出して」
信子は、電話機にかけよった。送受器を耳にあてると訊いた。
「どちらさんで？」
落ちついた男の声が言った。
「名前は言えない。娘さんは捕えてある。明日の朝、十時頃までに七百万揃えておけ」
頭を棍棒で強打されたような気持だった。誘拐の二字が、血のひいていく脳裡で烈しく揺れていた。信子は、嗄れた声で言った。
「そんなお金、ある訳ないでしょ？　あんたは誰です？由利子は一体……」
語尾を断ちきるように、男は早口で言った。
「とにかく揃えとけ。サッに知らせたりしたら、きかんぞ」
電話は切れた。信子は、もしもし、と叫んだ。だが、なんの応答もない。眩暈がして、その場にかがみこんでしまった。送受器は手に握ったままだった。
一時失神していたような気がしたが、それはなん秒かのことらしい。駆け寄ってきたお手伝いさんに抱きおこされた時は、女性経営者の気丈さをとり戻していた。
信子は、電話機のフックを押すと、震える指先でダイ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ヤルを回しはじめた。

4

高森信子からの急報をうけたのは、新潟中央署の杉井巡査であった。

同巡査の作製した「緊急電話の受理について」という報告書には、受理日時、昭和四十年一月十三日午後十時四十分頃、となっている。

なお、脅迫電話の時間も、十時四十分頃と記されているが、これは、高森信子がのちに九時四十分頃であると明言する。信子は、脅迫電話を受けたあと、五泉市の正裕の自宅へ電話して、突発事件を知らせた。ちょうど入浴中だった正裕は、裸のまま電話に出て話をきくと、すぐさま車で西大畑にかけつけた。

妻の頼子も同行している。正裕と信子は相談の上、警察に通報したという。だから、脅迫電話のあと、一時間後に通報されたという情況は事実に合致しているとみられた。その後の捜査は、すべて、九時四十分頃脅迫電話がかかったものとして、進められるのである。

いずれにせよ、十時四十分すぎ、その報告が当直主任に齎らされた時、同署の刑事官長沢警視は傍にいた。だが、即座に誘拐と断定した訳ではない。この種の犯罪には、狂言や悪戯が多いのだ。

しかし警察はつねに最悪の事態を考えて行動しなければならない。長沢は署長に報告すると同時に、高森宅へ急行する準備にかかった。

当夜の宿直員は合計十八名、そのうち七名が捜査課員であった。長沢はとくに緊急の用を割当てられてない四名を指名し、同行を命じた。テープレコーダー、ウォーキートーキーを携えた五名は、覆面パトカーで、残雪に凍てついた街を走り、高森家へ急いだ。

パトカーを高森宅の七十メートル手前で停めた。

犯人の監視を恐れたためである。長沢は、高森家の隣家西田家の主人に事情を話し、そこから高森家へ入れて貰った。両家は十五メートルしか離れていない。しかも敷地の奥の建物は棟続きになっている。廊下も続いていて、板戸で仕切られているだけだった。その点、非常に好都合な情況であった。

高森家に入ると長沢は、信子や正裕に、さし当って必要な事項を訊き質した。

被害者の年齢、経歴や当夜の行動は、概略掴めた。電話の呼出しに応じて出ていった経緯も判った。だが、肝心の呼び出された家の名前を信子が記憶していないので、すぐさま足取りを確かめる訳にはいかなかった。

長沢は、アルバムを借りうけ、由利子の写真三十余枚をはがして捜査員に持たせる用意をしながら、服装の点を質した。信子は説明した。

上は半コート。色はベージュ。襟裏は折返しになり、

モスグリーンと赤のチェック模様。フード付き。下は、ジャージーのスラックス。黒とエンジの千鳥格子。その他、黒皮手袋、半長靴、傘のことなども判った。

長沢は一名に付近の捜索を命じた。

犯人の目があるかもしれないので、多人数は動かせなかったからである。

あとは、犯人の出方を待つ以外にはなかった。電話機は玄関の近くの台の上にあった。それに録音装置を設置完了したのは、十時五十五分と報告されている。

長沢はすぐに隣家の西田宅にいった。電話を借りて、新潟電話局の庶務課長にかけた。

高森宅に録音装置を設けたことを連絡し、逆探知を依頼したのである。

戦後、逆探知は、憲法で保証されている〝通信の秘密〟を侵すものと非難されたが、吉展ちゃん誘拐事件などから、三十八年十月の閣議で、違法ではないと結論が出され、同年十二月、法制局から〝現行犯の逮捕協力に限って合法〟という見解が郵政省に通達されていた。

長沢は逆探依頼をすませると、本署に情況を連絡してから、高森宅へ戻った。間もなく応援がきた。長沢は、内張り員を二名増強して五名とし、周辺三ヵ所に二名一組の配置を行った。

高森家の電話は使わないことにした。いつ犯人からかかってくるか、判らないからである。本部への連絡は、西田家の電話か、ウォーキートーキーで行うようにした。長沢は、外張り員に絶対に目立たないよう行動せよ、と注意を与えておいて、一旦、署へ引揚げた。

5

長沢刑事官から一報をうけた中央署長新田警視正は、首をかしげた。誘拐事件としては、少々腑におちない点があったからである。

第一に、被害者の年齢の点である。その上、東京の大学を出て、デザイナーという先端的な職業をもっている女性だ。性格もしっかりしているという。そんな、二十代なかばの近代女性が、そうやすやすと誘拐されるだろうか？　どこかでお茶でも飲んで話しこんでいるのではないか？　夜中になってフラッと帰ってくるのではないか？　身代金要求の電話も、友達の悪戯とは考えられないか？　大体、七百万という大金を要求してくるのがおかしい。そんな額を朝までに用意しろと言ってもできる訳はない。

もし、犯人が本当に金銭目当なら、もう少し可能性のある額を言ってくるのではないか？　単なる嫌がらせとは考えられないか？

一昨年三月には〝吉展ちゃん事件〟、五月には〝狭山事件〟がおこっている。吉展ちゃんの方は未解決のまま

だが、その後、誘拐事件は一種の流行みたいな感さえある。
昨年も福井県と岐阜県で事件が発生した。これらは、男女関係の責任をごまかすために、誘拐されたというガセの届出をして、警察をキリキリ舞いさせたものだった。
それに最近、市内でも、悪戯か狂言としか思えない脅迫電話がかかる事件が続発している。
今回も、その類いではないだろうか？
署長の脳裡には、そんな疑惑が渦巻いた。
だが、申告をうけた以上、放置しておく訳にはいかなかった。
署長は、長沢刑事官を責任者に命じ、直ちに手を打たせた。長沢は捜査課員を主体にした、第一次召集を行った。
高森信子から届出があった約一時間十五分後の、午後十一時五十五分には、四十二名の捜査員が顔写真を携え、服装のメモをもって配置についた。
緊急配備、検問、検索と定石通りの活動に移った。だが、幹部たちの胸には、失踪者捜索というくらいの緊迫感しかなかったことは明らかである。
署長は、急ぎ登庁してきた次長の顔をみると、自分のカンを話し、相談した。
「マスコミに協力して貰って、本人に呼びかけてみたらどうだろう？」
慎重な性格の次長は、とんでもないというように首をふった。
「半信半疑なのは判りますが、万一、ほんものだったら、えらいことになりますよ」
そういわれれば、その通りだ。被害者は幼児ではない。誘拐の場合、犯人が顔を見られずに拐取することはむずかしい。
顔を知られた以上、身代金の問題は別として、恐らく生かしては返さない。非常に危険なケースとなるのだ。
署長は気軽に考えていたことを反省した。たとえ、狂言、悪戯だったとしても、警察としては、万全の対応策を講じなければならない。
零時をすぎた。手広く張り回らした検問、検索の線上には、なんの手応えもなかった。
申告が正確とすれば、高森由利子は午後八時四十分に家を出ている。すでに三時間二十分は経過した。お茶でも飲んでいるとしたら、本人から自宅へ連絡がないはずはない。
高森家の内張り員とは、ひんぱんに連絡している。その後は、電話は一本もかかっていないという報告だ。
外張り員たちも、付近の捜索、挙動不審者の職質を続けているが、なんの手懸りも掴めていない。
「いよいよ、ほんものだな」

長沢は呟くと、幹部たちと相談して、第二次召集を発令した。午前二時二十分には、二百四十五名の警官が配置についた。

配置の状況は次のようであった。

まず、中央署管内の交通要点四ヵ所に二十三名を配置した。勿論、各員には焼増した被害者の顔写真を携行させ、検問態勢を固めたのである。

一斉旅舎検に当ったのは、九十名であった。管内を十六の区域に分け、虱潰しの検索を行った。立入り調査した対象は、旅館百六十八、料飲店三百十八に及んだが、ちょうど盛業中の時間帯にぶつかったため、検索が充分に行届かない感は免れなかった。

タクシー会社を担当したのは、五組十四名であった。全員顔写真をもって、市内の業者十二社、個人タクシー営業者十九人を訪ね、捜査の協力を依頼した。

さらに、一斉検索に七十五名が投入され、現場を中心とした地取り、足取り捜査に五組十名を配置、高森由利子の発見に努めたのである。

公衆電話に対する張込みも考えた。だが、数が多すぎて手が回らない。新潟市内だけで、公衆電話ボックスが七十三、赤電話が五百九十二、一般加入電話が二万五千五百余もあるのだ。

仕方なく、当夜は、被害者宅を中心にした六つの派出所管内の公衆電話ボックス十三ヵ所に限り、徹夜の張込みを行った。

高森宅の内張り班五名の責任者は、同署捜査第一係主任の今村部長刑事であった。今村は犯人からの電話を待つ一方で、信子、正裕、頼子夫人などに、犯人の心当りや被害者の身辺状況、交友関係等の聴取を行い、その結果を長沢に連絡した。

新潟県警本部捜査第一課長加藤警視も、報告をうけた直後は、やはり半信半疑の気分だった。いや、正直にいえば、これ以上、厄介な事件は背負いこみたくない、という気持が強かった。

新潟地震以来、県下には凶悪事件が続発していた。殺人事件二件がいまだに未解決だし、その他、強盗、誘拐未遂などが頻発していて、県民は不安におののいている。

そこへ、また、誘拐事件の報告だ。できれば、間違いであってほしい。そうは思うがとにかく、脅迫電話があり、本人はすでに二時間半も消息が不明なのである。打つべき手はうっておかなければならない、と決心した。

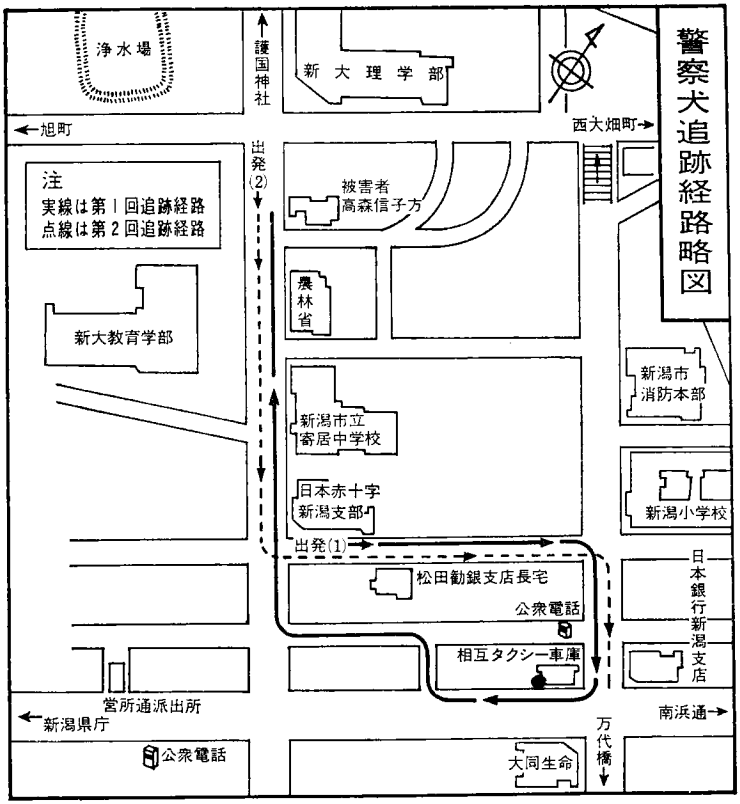
課長は、中央署の他に、東署、西署、及び被害者の勤務先のある五泉署に、緊急配備を依頼し、検問、捜索を指示した。

苦慮したのは、手配内容であった。ただ単なる家出人とすると、捜査員の熱意にひびく。だが、捜索はあくまで隠密裡に行わねばならない。

課長は、こう付け加えた。
「幹部には、誘拐の可能性が大きいことをはっきり伝えて下さい。但し、訊込みの場合は、マスコミに対する秘匿ということを第一に考え、家出人ということで捜索を進めて下さい。お願いします」

6

市内営所通り派出所へ、妙な届出があったのは、午後十一時半すぎであった。届出人は市内寄居町七の四の二、日本勧業銀行新潟支店、松田支店長夫人であった。
「八時すぎだったと思います。ベルがなるので出てみますと、二十代の女の方が立っておられまして、うちの車がお宅の邪魔になっていると警察でいわれて、お詫びに伺ったんですけど、というんです。
でも、うちでは、そんなことを届けた覚えはないし、なにかのお間違いじゃないですか、というと、もう一度調べてみます、といって帰っていかれました。
主人が帰宅して、その話をしますと、しきりに首をかしげていましたが、なにか犯罪に関係しているといけないから、一応、警察に届けておけ、と言われまして……」
この報告は、すぐに本署の長沢刑事官のもとへ届いた。松田宅は、高森家から二百五十メートルしか離れていない。
犯人が呼出しの口実につかったのは、松田宅であったことは確実となった。
松田宅を出て、由利子はどうしたのだろう？
常識的に考えるなら、電話は悪戯だと判ったのだから、いまきた道を逆に戻るのではないだろうか？　その途中で誰かに会い、車に乗せられたのではないか？　だから、足取りが掴めないのだろう。
長沢は、署長に警察犬の出動を提案した。署長は賛成したが、署には警察犬は配備されていなかった。直ちに、市内万代町の大川訓練所へ協力を依頼した。
だが所長はすぐには出動できないという。
「夜中ですと、餌を与えてかなり時間をおかなければ、使いものにならないんですよ」
大川所長がシェパードのフジエダ号を伴って署へ現われたのは、午前二時をすぎていた。
所長と相談の上、原臭は被害者がふだん着用していた肌着を使うことにした。松田宅を出発点にして二回にわたる追跡が行われた。●
その追跡経路について、綿　　示、採証を行った。
雪は薄く積っていた。だが　　相当数の人車の往来があった後なので、容疑車輌　　ヤ痕を確定するのはむずかしかった。
ただ、高森宅の門前に、寄居方向に向っている女性のゴム靴の足跡が二個発見された。これは後刻、被害者の



（警察庁「第一線」より）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.